



TITLE:

前回のレオニッド流星に就て

AUTHOR(S):

横地, 石太郎

CITATION:

横地, 石太郎. 前回のレオニッド流星に就て. 天界 1933, 13(143): 92-92

ISSUE DATE:

1933-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162327>

RIGHT:

前回のレオニッド流星に就て

横地 石太郎

前回即1899年明治32年11月のレオニッド流星は14日より15日に掛けて最も多からんと思ひ居りたるに、當時東京天文臺長より16,17兩日の午後11時半より翌日の午前5時頃までが最も盛なる時ならんとの報を得たれども、余は當時松山市にありて、14日の午前3時より5時までと、15日の午前3時半より6時まで観察し、下記の結果を得たり。16,7日の兩夜も観察せんとせしも、此兩夜は流星の數殆ど平常と異なる事なかりし故、中止せり。

日	時	分時數	流星數
14日	午前3時—5時	120,	76, ×
15日	午前3時半—5時	90,	200, ×
同	5時10分—同23分	13	24,
同	23分—40分	17	5,
同	45分—6時	15	4

上の中、×印を付するものは多人數にて數へ、其他は余一人にて數へたるものにて、數へ漏れ少なからざるが如し。現に14日の午前3時45分より5時に至る間に余一人にて數へたる數は僅に16であり、15日午前4時より45分間には31であつた。流星の多くは西及北に向つて飛び、東方へ飛びたるものは殆ど絶無であつた。又レオニッド群に屬せざるものは極めて稀であり、中に甚だ大にして光芒の消へざること2,3秒に及びたるものもありたり。殊に15日の午前6時前に見たる4の内3の如きは曙光既に中天に達し1等星も微に餘しも著明なる光芒を曳けり。15日には時の進むに隨ひ流星の數は次第に繁くな光を留むるの時なりりたれども曙光隨つて強くなりたる故微小なるものは次第に認ること能はざる様になり行き、遂に夜明けければ松山市にては雨下の盛況を見ることを得ず、期待されたるよりは甚だ貧弱なるものであつた。此前のレオニッド流星は慶應2年10月8日即1866年11月14日であつて、當時京都に在りて之を目撃せし余の父の語に依れば流星雨下の壯觀を呈したるものの如し。尙1833年のものの如きは米國に於ては更に盛況を呈し無數の流星は雪花の風に亂れて粉々として飛ぶが如くに降りたりとの記事あり。然るに今回の如きは期日前にも別に多き様にも認められず、今16日午後11時過でも十數分間に殆ど一も見ることを得ず、月明の障礙にもよるべけれども豫想の外れたるを覺ゆ。明日は果して如何あるべき歟。レオニッド流星も回を重ねるに隨ひ次第に減少するものにあらざる歟と素人考には思はる如何。

右今回の流星期に當り前回のものの狀況報告の其當時甚だ渺なかりし様覺ゆるが故に參考の爲め記し置く次第である。(7年11月16日夜誌)

寄稿者横地石太郎氏は山口高商名譽教授で現在京都に自適して居られる方であるが、この前の金星の太陽面通過をも望遠鏡で觀測せられたといふ天文學界の古參であられる。尙ほ同氏はお若き頃松山中學に教鞭をとられたことのある人で、例の夏目漱石の「坊ちゃん」では山嵐先生のモデルであるといはれてゐる。(上田)